

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：34439

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05798・19K20990

研究課題名(和文)19世紀イギリス自由教育論争におけるT. H. ハクスリーの教養概念に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Conception of Culture in T. H. Huxley: Centering around the position in the Controversy over Liberal Education in England in the 19th Century

研究代表者

本宮 裕示郎(Hongu, Yujiro)

千里金蘭大学・生活科学部・助教

研究者番号：30823116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：教養概念をめぐる、当時の知識人の中で重層的に展開された19世紀イギリスの自由教育論争で、科学教育を推進する立場にあったT. H. ハクスリーと、その主たる論争相手で文学教育を擁護する立場にあったM. アーノルドの自由教育論争における位置づけを「自由教育の理想的な教育内容は何か」、「自由教育は誰のための教育か」という2つの問いから検討した。検討の結果、J. H. ニューマンやJ. S. ミルなどの他の代表的な論者が「エリート教育としての新たな自由教育」を模索していたのに対して、ハクスリーとアーノルドは「エリート教育ではない新たな自由教育」を模索していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究では、19世紀イギリスで起きた自由教育論争において、T. H. ハクスリーとM. アーノルドは、それぞれ科学教育と文学教育を象徴する人物とみなされ、程度の差こそあれ、両者の主張は対立するものと考えられてきた。しかし、本研究を通じて、エリート教育ではない新たな自由教育のあり方を模索していたという点で両者が共通する問題意識を抱えていたこと、そして、両者が異なるアプローチ(ハクスリーは科学教育、アーノルドは文学教育)によって、新たな自由教育の実現を試みていたことを明らかにすることで、両者の自由教育論争における位置づけを素描した。

研究成果の概要(英文)：A number of controversies arose over the contents of liberal education and the concepts of culture in England from the middle to the end of the 19th century. Intellectuals participated actively in these controversies. This research examines ideas of J. H. Newman, J. S. Mill, H. Sidgwick, T. H. Huxley, and M. Arnold about liberal education based on two questions: "What are the ideal contents of liberal education?" "Who is liberal education for?" Newman, Mill and Sidgwick sought ways toward new liberal education as education for the children of the elite, while Huxley and Arnold sought new liberal education for all children.

研究分野：教育方法学(教養論・学力論)

キーワード：教養概念 19世紀イギリス 自由教育論争 T. H. ハクスリー M. アーノルド 知性 道徳性

1. 研究開始当初の背景

現在、教養とは何かが改めて問われている。学力が教育学研究の中心的な位置を占めてきたのに対して、教養は権威主義的なニュアンスをまとう古めかしいものとみなされてきた。折に触れて集まる教養への注目は、拡大する実用志向に対する自戒と反省を意味し(豊田ひさき「はじめに」豊田ひさき他『教養と学力』愛知教育大学出版会、2011)、幅広い知識によって狭められた視野を広げようとする意図が込められている。

このような、過熱した実用志向に対して、いわば冷却装置的な役割を担う教養概念の現状は、2000年代に入ってからさらに顕著になっている。2000年前後に起こった「学力低下論争」を受けて、2002年に中央教育審議会が「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)」を出し、新たな教養概念を構築する必要性を説いた。しかし、そこでの教養概念は「人間形成や教育のありとあらゆる側面を含みこむ」幅広いもので、多くの意味を込められすぎたために、結局意味をなしていないことが指摘されている(松浦良充『リベラル・アーツ』をめぐる理解と誤解 比較大学・高等教育史の視点から 同志社大学文学部教育学研究室『教育文化』第13号、2004)。また、近年の政治界や経済界からの人文科学批判に呼応するかのよう、街中の書店や広告では、教養本や教養セミナーといった使われ方で、教養という言葉がその紙面をにぎわしている。人文科学批判の真意については議論の余地がある一方で(吉見俊哉『文系学部廃止』の衝撃』集英社、2016)、教養がこうした批判を論駁する力を得ていないことも指摘されている(山脇直司編『教養教育と統合知』東京大学出版会、2018)。

このような現状に陥っている要因の1つは、教養概念がもつ「広さ」にある。「広さ」という一般性は、教養概念に含まれる伝統的な特徴の1つである(Rothblatt, S. *Tradition and Change in English Liberal Education*, London: Faber and Faber, 1976)。そのため、「深さ」を特徴とする専門性にしばしば対置されてきた(筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』、1995)。一般性と専門性の対置は、特に、日本においては、高等教育の教養科目と専門科目の関係に重ね合わせて論じることができるため、日本での教養概念研究は、主に、高等教育の問題として扱われてきた(寺崎昌男『大学教育の創造』東信堂、1998・山脇編、前掲書)。

しかしながら、これらの研究はその範囲が限定なものとなっている。なぜならば、教養という言葉は、英語 culture やドイツ語 Bildung の翻訳語であり、元来、高等教育だけではなく、生涯を通じて目指されるまさに人格形成を意味しているからである(ウィリアムズ『完訳キーワード辞典』平凡社、2002・山名淳他編『人間形成と承認 教育哲学の新たな展開』北大路書房、2014)。つまり、日本の教養概念は、意味が「広く」とらえられている一方で、その範囲は「狭く」とらえられてきたのである。このように、現代的な視点と歴史的な視点の両方から、高等教育に限定せず、初等・中等教育のカリキュラムとも関連づけて、教養概念の意義を探ること、言い換えれば、範囲を広げることによってその意味を狭くすることが喫緊の課題になっていると言えよう。そこで、本研究では、19世紀中葉のイギリスで展開された自由教育論争を取りあげ、日本の教養概念の起源の1つとされる教養概念 culture を検討することによって、初等・中等教育を含む教育活動におけるカリキュラム上での教養概念の意義を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は、自由教育論争において科学教育を推進した立場の1人である T.H.ハクスリーの思想に着目して、教養概念の意義を探ることを目的とする。自由教育論争とは、19世紀中葉のイギリスにおいて、教養概念の本質をめぐり、初等教育から高等教育に至る、理想的な教育内容について、文学教育を擁護する立場と科学教育を推進する立場の間で生じた論争である。そこでは、文学や科学がもつ陶冶価値とは何か、そしてそれらの価値が教養概念にどう資するのかが問われた。ハクスリーは、科学者であり教育者でもあった自らの経験にもとづいて、科学教育を推進する立場から、高等教育に限定されることのない自由教育論を展開した。

ハクスリーの自由教育論については、先行研究においては、主に、思想研究として理論的な観点から研究が蓄積されてきた(前田博『自由人の育成と一般陶冶』未来社、1970・White, R., "The Anatomy of a Victorian Debate: An Essay in the History of Liberal Education," *British Journal of Educational Studies*, vol.34, No.1, 1996)。しかし、管見のかぎり、カリキュラムとしての観点からは論じられず、理論と実践の往還という、より包括的な視点が欠如してきた。そのため、科学者であり教育者でもあった自らの経験にもとづいて、初等教育から高等教育へと連なる、理論と実践の双方からの自由教育論を展開したハクスリーの思想を検討することで、教養概念の意義をカリキュラム・レベルで問い直す点に本研究の学術的独自性がある。本研究の完成により、学力と教養の概念的な整理が実現し、学力概念研究も理論と実践の両面から深まるだろう。

3. 研究の方法

本研究では、ハクスリーの教養概念のなかで、真・善・美と実用性の関係がどう解釈されていたのかを明らかにする。論争の対象となった自由教育は、古代ギリシャでは自由人のための教育を意味し、真・善・美の追究によって閑暇を美しく過ごすためのものであった。そのため、実用性を重視する、奴隷のための職業教育とは区別され(岡田渥美「教養 その思想史的考察」)

松島鈞ほか編集幹事『現代教育問題史 西洋の試みとの対話を求めて』(明弦書房、1979)、真・善・美と実用性は交わることがなかった。真・善・美と実用性の関係は、19世紀に入り、科学技術の発達にともなって実用性の価値が認められることで、見直しが迫られた。19世紀における真・善・美とは何かが問われるとともに、実用性をどう受け入れるかが問われたのである。研究代表者はこれまでの研究でハクスリーの教養概念の意義が真・善・美と実用性の関係を、真を中心に置き、真から善・美・実用性が導かれる関係に組み換えることで、従来の対立関係を架橋させた点にあることを論証してきた。本研究では、この成果をもとにして、ハクスリーの教養概念のなかにある、科学と真、科学と善、科学と美、科学と実用性といった関係について、19世紀当時の主流な実践や理論と結びつけて論じる。2018年度には、科学と真の関係について、ハクスリーによるC.ダーウィンとD.ヒュームの解釈から、また、科学と実用性の関係について、当時の代表的な実践家であるR.ドーズとJ.S.ヘンズローの科学教育論との比較から、それぞれ明らかにする。2019年度には、科学と美の関係について、直接の論争相手であり文学教育擁護派であったM.アーノルドの芸術観との比較から、また、科学と善の関係について、晩年期に行った講演「進化と倫理」の内容にもとづく、H.スペンサーとの異同の整理から、それぞれ明らかにする。これらの検討を通じて、ハクスリーの教養概念がもつ独自性を追究し、カリキュラム・レベルでの実践的かつ理論的な意義と課題を明らかにする。

4. 研究成果

2018年度の研究において、19世紀イギリスの自由教育論争に関する文献を読み進めるうちに、ハクスリーと主たる論争相手であったアーノルドの両者は、初等教育から高等教育に至る学校教育全般の改革を見据えている点、他の論者と比べて教育現場により近い位置からカリキュラム・レベルでの教育改革論を展開しているという2点において、自由教育論争のなかで特異かつ対照的な位置づけにあることが見えてきた。そこで、従来の計画では、真・善・美と実用性の止揚という観点からハクスリーの教養概念を中心に検討を試みる予定であったが、2018年度の研究成果を踏まえて、2019年度は、ハクスリーの論争相手であるアーノルドにまで視野を広げ、自由教育論争における両者の位置づけを一層明確にするために、自由教育論争の論点を整理し、代表的な論者と両者の比較を試みた。具体的には、教養概念(culture)に関するR.ウィリアムズやS.ロスプラットらの研究成果を受けて、教養概念に含まれる知性と道徳性の関係に着目したうえで、「自由教育の理想的な教育内容は何か」、「自由教育は誰のための教育か」という2つの問いから、J.S.ミルやJ.H.ニューマン、H.シジウィックといった自由教育論争の他の著名な論者が説く教養概念とハクスリー、アーノルドのそれぞれが説く教養概念の異同を整理した。

この整理を通じて、ニューマン、ミル、シジウィックが、「エリート教育としての新たな自由教育のあり方」を模索したのに対して、ハクスリーとアーノルドが、「エリート教育ではない自由教育のあり方」を模索しており、前者3人と後者2人の間で異なる問題意識が共有されていたことを明らかにした。

それと同時に、問題意識を共有していたニューマン、ミル、シジウィックであっても、自由教育や教養概念に関するそれぞれの論者の主張においては、知性と道徳性の関係が三者三様にとらえられていたこと、つまり、ニューマンは、道徳性を知性の獲得に付随する、副次的なものととらえ、ミルは、道徳性を知性によって下される判断とみなし、シジウィックは、相対化を図るという点で、知性と道徳性は重なりあうものと見ていたことを明らかにした。

また、ハクスリーとアーノルドが共有した問題意識の背後には、知的にも道徳的にも荒廃した当時の教育現場との直接的な関わりがあり、こうした共通の経験から、エリート教育としてではなく、知性と道徳性をともに涵養する、すべての子どもに開かれた新たな自由教育のあり方を模索していたことを指摘した。ただし、新たな自由教育の実現に向けて、両者が思い描いた道筋は対照的なものであった。すなわち、ハクスリーが、人間を自然の一部とみなし、科学教育を通じて、自然法則が導かれるのと同じ論理で、道徳法則も導かれると説いたのに対して、アーノルドは、知性軽視、道徳性重視という当時のイギリス社会において、「事物をあるがままに見る」ヘレニズムに象徴される知性の重要性を説いた。言い換えれば、知性と道徳性の関係について、ハクスリーは知性から道徳性へと至る、一元的な関係でとらえていたのに対して、アーノルドは、知性と道徳性を両立しうる二元的な関係でとらえていたことを明らかにした。

本研究を通じて、ハクスリーとアーノルドがそれぞれに求めた理念としての教養概念の位置づけは素描できたものの、自由教育論争の全体図をとらえる精緻な検討にはなっておらず、また、当初の目的であった教養概念とそれを実現するためのカリキュラムの関連を考察することもできていない。これらを今後の研究の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 本宮裕示郎	4. 巻 66
2. 論文標題 19世紀イギリス自由教育論争の再整理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----